

▶お知らせ 2021年卒向け「会社説明会」を開催します

1月24日(金)

週刊東洋経済プラス | 四季報オ:

トップ ビジネス 政治・経済 マーケット キャリア・教育 **ライフ**ライフ ▶ 「薬害・廃人症候群」を知っていますか?

殺人の原因にもなりうる抗認知症薬の大リスク

厚労省や医師の問題認識はこのままでいいのか

[次ページ »](#)

坂口直: 医薬経済社編集部 記者 / 辰濃 哲郎: ノンフィクション作家

2020/01/24 5:15

シェア 76

ツイート

一覧

2

コメント

0

印刷

A

A



副作用で最悪の事態を招いた実例がある (写真: Graphs/PIXTA)

医師から処方される薬剤が原因で、生気がなくなったり、落ち着きを失ったり、認知機能が低下したりする高齢者が数十万人に及ぶかもしれないとしたら信じられるだろうか。

これを「薬剤起因性老年症候群」と呼ぶが、高齢者にとって人生総決算の大切な時期に普段の自分を見失うことは、いわば尊厳を奪われるに等しい。注意を要する薬剤を適正に使っていない点では、まさに「薬害・廃人症候群」と呼ぶべきだろう。計3回の短期集中連載の最終回をお届けする。

[第1回「認知症の数十万人『原因は処方薬』という驚愕」\(2020年1月22日配信\)](#)

[第2回「『睡眠薬で高齢者『寝かせきり』病院・施設の闇\(2020年1月23日配信\)」](#)

副作用／有害事象は「殺人」

ちょうど5年前の2015年1月13日付の神戸新聞に、こんな記事が掲載された。社会面の中ほどに載った、見落としてしまいそうなベタ記事の扱いだ。

「夫に殴られ 73歳妻死亡」

兵庫県姫路市内に住む76歳の無職の男性が自宅で妻(73歳)を殴って死なせてしまったという事件だ。記事によると男性は「妻がぶつぶつ言っていたので腹が立って素手で1発殴った」と認めているという。罪名は傷害から傷害致死に切り替えられている。

一見、単なる夫婦喧嘩の延長にも見えるこの事件だが、そんな単純なものではないことが、後にわかる。

厚生労働省所管の独立行政法人である医薬品医療機器総合機構（PMDA）には、全国の医師や製薬会社などから報告のあった医薬品の副作用事例を「症例一覧」として公開している。この症例をたどっていくと、同じ日付の報告事例がある。「副作用／有害事象」の欄に「殺人」とある。「発現日」は、事件のあったのと同じ「2015年1月12日」で、「70歳代」「男性」も一致する。もちろん個人名や地域名も書かれていないので、確実というわけではないが、姫路の事件のことを指していると思われる。



この連載一覧は[こちら](#)

症例報告によると、この男性はアルツハイマー型認知症の患者で、抗認知症薬、降圧剤、糖尿病薬、高尿酸血症治療薬など複数の薬剤を服用している。その中で、殺人という副作用を起こした被疑薬を「ガランタミン臭化水素酸塩／レミニール」に絞り込んでいる。

レミニールとは、日本で使われている4つの抗認知症薬の先発品の1つだ。その添付文書の副作用欄に「激越」「怒り」「攻撃性」などの精神障害が記されている。この男性が妻を殴打したのは、副作用の疑いがあると報告されていた事例だったのだ。

→ 次ページ さらに驚いたことに



コメント (0)

関連記事



認知症の数十万人「原因は処方薬」という驚愕



睡眠薬で高齢者を「寝かせきり」病院・施設の闇

合法的な薬物依存「デパス」の何とも複雑な事情

親の死亡保険を得た子が受けた「酷い仕打ち」

注意！認知症の兆候は3つの違和感に表れる

「赤信号を平気で渡る老人」への大きな誤解

トピックボード

AD



H2

3

MMSE

28

2015

H2

1 2 3 4 5

認知症の数十万人「原因は処方薬」という驚愕

睡眠薬で高齢者を「寝かせきり」病院・施設の間

合法的な薬物依存「デパス」の何とも複雑な事情

親の死亡保険を得た子が受けた「酷い仕打ち」

注意！認知症の兆候は3つの違和感に表れる

「赤信号を平気で渡る老人」への大きな誤解

AD



**今求めら
し続ける」**



**公平性だけ
詰まる背景**

ダイキン「20年変わらない」エア:

「現役大学生」が語る企業選びの意

▶お知らせ 2021年卒向け「会社説明会」を開催します

1月24日(金)

週刊東洋経済プラス | 四季報オ:

トップ ビジネス 政治・経済 マーケット キャリア・教育 **ライフ**

ライフ ▶ 「薬害・廃人症候群」を知っていますか?

殺人の原因にもなりうる抗認知症薬の大リスク

厚労省や医師の問題認識はこのままでいいのか

[« 前ページ](#)

坂口直: 医薬経済社編集部 記者 / 辰濃 哲郎: ノンフィクション作家

2020/01/24 5:15

シェア 79

ツイート

一覧

2

コメント

0

印刷

A

A

本連載で私たちは、ベンゾジアゼピン系薬剤に抗認知症薬、それに胃腸薬のH2ブロッカーを取り上げてきた。高齢者が最も失いたくない認知機能や運動機能の低下、それに過鎮静など、それまでの生活を一変させてしまう副作用の危険性が起きうる薬剤だ。だが、危険な薬剤はこれだけではない。

2017年8月、日本神経学会は、認知症疾患診療ガイドラインを公表した。認知機能の低下を誘発しやすい薬剤を一覧表にまとめている。私たちが取り上げた薬剤以外にも抗精神病薬、抗うつ薬、抗がん剤、抗ウイルス薬、抗菌薬など薬効の下に300種類近い薬剤名が挙げられている。

鎮痛薬としては有名なリリカやインフルエンザに対する抗ウイルス剤であるタミフル、高脂血症薬としていま最も使われているクレストール、泌尿器科の薬剤として売り上げ上位のベシケア、ガスターの次の世代の胃腸薬であるタケプロンやパリエットの名前もある。これらは医療現場で広く使われている一般的な薬剤だ。

高齢者に対する意識の希薄さが根底に

もちろん、これらの薬剤を必要とする患者もいるし、有用性を否定するつもりはない。だが、その前提となるのは、医師の危険性認識だ。いろいろな学会が警告を発しているにもかかわらず、知らない医師が多すぎるというのが、減薬に取り組んでいる専門医らの共通した見解だ。医師が知らなければ、副作用を起こしていることさえ見過ごし、高齢者は不本意な末路をたどって命を落としていく。

その医師に適正な使用を促すべき厚労省は長い間、注意喚起を怠ってきた。薬剤の安全性情報の基本ともなる添付文書にさえ危険性を載せないという行政の不作為は、かつて問われた薬害事件と同じ構図であることに気づく。これが連載タイトルに「薬害・廃人症候群」とつけたゆえんでもある。

この問題が放置されてきた背景には、いまの医療の高齢者に対する意識の希薄さがあるように思える。もし、同じような問題が青少年に起きていたとしたらどうだろう。医者も厚労省も看過できないはずだ。

「高齢だからボケるのは仕方ない」「もう古い先が短いのだから」と命に見切りをつけてはいないだろうか。

この世に生を授かり、社会の荒波にもまれながらも生き抜いてきた高齢者にとって、晩年の身の処し方は、その生きた証しを遺すための大切な時期のはずだ。その最終章を迎えたときに、廃人同然にさせられては、たまったものではない。

1 2 3 4 5

コメント (0)

関連記事

認知症の数十万人「原因は処方薬」という驚愕	睡眠薬で高齢者を「寝かせきり」病院・施設の闇
合法的な薬物依存「デパス」の何とも複雑な事情	親の死亡保険を得た子が受けた「酷い仕打ち」
注意！認知症の兆候は3つの違和感に表れる	「赤信号を平気で渡る老人」への大きな誤解

トピックボード

AD

 デザイン思考 育成講座	 20代が変い 若いからて
ランサムウェアのサイバー攻撃に	近年増大…「災害リスク」対策、成
「現役大学生」が語る企業選びの言	DXがもたらす大学教育現場の可

ライフの人気記事

王室離脱する「ヘンリー王子夫妻」を待つ茨の道	自衛隊で実践されている究極の「片づけ術」とは
「新型コロナウイルス」日本の備えに不安しか募らない理由	37歳高学歴男性が7年婚活で結果が出ないワケ
おっさんと住む元アイドルの揺れ動く「結婚観」	認知症の数十万人「原因は処方薬」という驚愕

連載一覧

トレンドライブラリー

AD